jh190054-NAH

# 界面に適合するAMR法を用いた非圧縮性 気液二相流の完全陽解法計算とGPU実装 – 液膜・泡沫への適用 –

#### 東京工業大学 学術国際情報センター

青木 尊之



### 共同研究体制



青木 尊之	東工大(研究代表者)	研究総括および計算手法から GPU実装に至る詳細な指示
白崎実	横国大(副代表者)	気液界面における表面張力項の 離散化と液膜安定性
小野寺 直幸	日本原子力研究開発機構	ノード間通信の最適化、 Temporal Blocking
杉原 健太	東工大	固体衝突の物性パラメータ設定
松下 真太郎	東工大	弱圧縮性流体計算手法の改良、 音速低減とAMR実装
渡辺 勢也	九大	GPUカーネルのチューニング
長谷川 雄太	日本原子力研究開発機構	階層的メモリ管理の実装

### 研究背景



非圧縮性気液二相流は日常的にも頻繁に現れるが、流体力学的 に十分に理解されていない。現状の数値解析は、格子解像度が 全く不足しており、学術的にも産業利用の観点でも、高解像度 解析が求められている。

#### 従来法の欠点:

- 大規模計算では非圧縮性条件を満足させるためのPoisson 方程
   式(疎行列の反復計算)の収束性が大きく低下。
- ・計算領域全域を均一に高解像度にすると、計算コストが膨大。

共同研究を実施した拠点名:九州大学・情報基盤研究開発センター ITO サブシステム B 2018年度

### 弱圧縮性解法による完全陽解法





> 等温過程(温度が一定の圧縮過程)の導入 2019年度

▶ 弱圧縮性近似(流速が音速に比べて十分小さい)

<u>ポアソン方程式の代わりに、音速C<sub>s</sub>の音波伝播を含む圧力発展方程式を計算</u>2019年度

#### 半陰解法から完全陽解法へ

<u>人工的な音速の低減:Mach 数の制御</u>(時間刻み∆*t*を大きくし,計算の大幅な高速化) <u>現実よりも大きな圧縮: 十分に非圧縮性流体と見なせる範囲内で制御</u>

### AMR法のGPU実装



- ✓ WaLBerla: LBMの大規模並列計算が可能だが ドイツのErlangen-Nuremberg大学で開発
- ✓ Basilisk: 気液二相流の半陰解法による並列計算が可能
   フランスのPopinetら研究者によって開発
- ▶ 気液二相流計算ができていない
- ➢ GPU実装ができていない
- > 半陰解法の収束性悪化に縛られる





D	evic	e m	em	or	y po	ool								
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10				



De	evi	ce n	ner	nor	y pool						
					XXX						
0	1	2	3	4	5	6	7				



Device memory pool

#### 

 ✓ リーフを空間充填曲線で結び、GPU上で並列計算を実行
 ✓ メモリ・プールを自分で用意し、動的にリーフの管理 (デ・フラグメンテーション)



## Jet flow計算による高速化の確認





Basiliskのベンチマーク問題

無次元時間を次のように定義: 
$$t^* = t \frac{U_0}{D}$$

\*Shinjo, J., & Umemura, A. (2010). Simulation of liquid jet primary breakup: Dynamics of ligament and droplet formation. *International Journal of Multiphase Flow*, 36(7), 513–532. https://doi.org/10.1016/j.ijmultiphaseflow.2010.03.008





#### 格子点数1/30以下に削減

<u>非圧縮性ソルバー均一格子で解いた既往研究</u> JSS (JAXAの1世代前のスパコン)の5760coreで 410×13.6/16 = 350時間程度要する計算規模 (TSUBAME 2.0 の1/3のシステムに相当)

1台のGPUで11時間で計算完了





計算領域0.16 x 0.16 [m]格子数均一な最細格子なら8192 x 8192相当初期気泡内径D16 [mm] ( 819 dx )液相:気相20%グリセリン水溶液:空気密度1045.9:1.2 [kg/m³]粘性係数1.769 x 10<sup>-3</sup>:1.8 x 10<sup>-5</sup> [Pa・s]表面張力係数0.02 [N/m]



流入条件は空間的にポアズイユ流れ,時間的には t=0.01sまで線形に加速 where:

$$u_{in}(y) = U\left(1 - \frac{(y - y_c)^2}{R^2}\right), \qquad U = 0.25 \text{ m/s}$$
  
$$u_{ac} = 0.01 \text{ s}$$
  
$$u_{in}(y,t) = \min\left(u_{in}(y)\frac{t}{t_{ac}}, u_{in}(y)\right) \qquad R = 0.5D$$
  
$$y_c = 0.08$$

# Soap Bubble Growing





# Soap Bubble Growing







### 粘弹性流体解析









無次元数:

$$Re = \frac{\rho UL}{\mu_0} = 5.0, Wi = \lambda \frac{U}{L} = 1.0, Fr = \frac{U}{\sqrt{gL}} = 2.26, \beta = \frac{\mu_l}{\mu_l + \mu_p} = 0.3$$
$$Ma = \frac{U}{c_s} = 0.03$$









\*Figueiredo, R. A., Oishi, C. M., Afonso, A. M., Tasso, I. V. M., & Cuminato, J. A. (2016). A two-phase solver for complex fluids: Studies of the Weissenberg effect. *International Journal of Multiphase Flow, 84*, 98–115. https://doi.org/10.1016/j.ijmultiphaseflow.2016.04.014

### 水面に達した気泡の液膜安定性への影響



		1	計算する	ケー
│ <u>液面に衝突する</u> │ 計算領域	<u>贰泡上昇問題</u> 0.02 x 0.04 [m]			L
格子数 初期気泡直径d	512 x 1024 相当 8.0 [mm] ( 51dx, 102dx )		Case A-1	1(
│ 液相:気相 │ 表面張力	水:空気 (20℃) 72.8 x 10 <sup>-3</sup> [N/m]		Case A-2	1(
│ 重力加速度	(0, -9.8) [m/s]		Case A-3	1(

無次元数:

$$\beta = \frac{\mu_l}{\mu_l + \mu_p} = 0.1 \quad U = \sqrt{gh} = 0.313$$
$$De = \lambda \frac{U}{L}$$

計算するケース *L De* Case A-1 10 5 Case A-2 10 10 Case A-3 10 25 Case B-1 2 5 Case B-2 5 5





緩和時間の液膜への影響





(a) De = 5



(b) De = 10









第面活性剤輸送とマランゴニ効果を考慮した弱圧縮性気液二相流解析  
パルク/界面上の界面活性剤移流・拡散方程式:  

$$\frac{\partial F}{\partial t} + u \cdot f - f(n \cdot \nabla u \cdot n) = D_f(\nabla^2 f - n \cdot \nabla \nabla f \cdot n - \kappa n \cdot \nabla f) + j$$
  
気相側への外挿+界面周辺へ分布作成  

$$\frac{\partial f}{\partial \tau} + S(\psi)n \cdot \nabla f = 0$$

$$\frac{\partial F}{\partial \tau} = S(\psi)n \cdot \nabla F$$

$$= S(\psi)n \cdot \nabla F$$

### 界面活性剤の吸着脱離の輸送方程式

AOKILab.

## 水面に達した気泡の液膜安定性

#### <水面に到達する気泡上昇問題>

計算領域 0.02 x 0.04 [m] 格子数 512 x 1024 相当 初期気泡直径d 8.0 [mm] (51∆x, 102∆x) 液相:気相 水:空気 (20℃) 表面張力 72.8 x 10<sup>-3</sup> [N/m] 重力加速度 (0, -9.8) [m/s]

#### 実際の界面活性剤の物性値を使用

$k_{ m ad}$ : 吸着速度係数
$k_{ m de}$ : 脱離速度係数
<i>f</i> lim : 飽和濃度

	$k_{\rm ad}$ [ m <sup>3</sup> /( mol· s)]	$\beta$ [mol/m <sup>3</sup> ]	$f_{\rm lim}$ [mol/m <sup>2</sup> ]	$k_{\rm de}[\rm \ s^{-1}]$
Triton X-100	50	$6.6  imes 10^{-4}$	$2.9  imes 10^{-6}$	0.033

#### <u>溶液濃度F。を変えることでラングミュア数Laを変化させて計算</u>







21

### 界面活性剤による液膜の安定化



初期の界面上活性剤濃度を0として計算 j(t=0) = 0







### 濃度差マランゴニ効果による液膜安定化

# 界面上の界面活性剤濃度 fの飽和濃度に対する比率 $f_{lin}$



- 気泡上昇に伴い,界面活性剤は気泡後方 へ輸送される
- 液体自由膜形成後は重力によって界面活 性剤濃度は気泡中心より気泡左右の方が 高くなる
- 界面活性剤濃度が高い方から低い方へマ ランゴニ効果が働き、重力と逆方向の力 によって液膜が安定化

t = 0.25 s

泡沫(Foam)シミュレーション



#### **準安定な液膜で隔壁が構成された気泡群:** 食品:ビールの泡、パン、マシュマロ、ホイップクリーム、抹茶、カプチーノ 工業製品:発砲スチロール、軽量素材、洗剤、化粧品、・・・

#### 超難易度の数値シミュレーション:

非常に薄い液膜の気液二相流(気泡径に対する液膜厚さのマルチスケール) 気液界面での界面活性剤等の輸送、非ニュートン性の顕在化 液膜を介した物質輸送・熱伝達

MPFによる泡沫シミュレーション



#### MPF (Multi-Phase Field) 法の導入





Transactions of JSCES, Paper No.20130018 「多結晶粒成長シミュレーション」岡本成史, 山中晃徳, 下川辺隆史, 青木尊之

$$\frac{\partial \phi_i}{\partial t} + \nabla \cdot (\phi_i \boldsymbol{u}) = D \left[ \nabla \cdot \left\{ \nabla \phi_i - B \phi_i (1 - \phi_i) \frac{\nabla \phi_i}{|\nabla \phi_i|} \right\} - \frac{\phi_i^2}{\sum\limits_{j=1}^N \phi_j^2} \sum\limits_{j=1}^N \left[ \nabla \cdot \left\{ \nabla \phi_j - B \phi_j (1 - \phi_j) \frac{\nabla \phi_j}{|\nabla \phi_j|} \right\} \right] \right]$$

MPFによる泡沫シミュレーション





#### 2020年度 JHPCN 課題:JH200018

### Summary



- 弱圧縮性気液二相流計算手法に等温過程を導入:気液界面に細かい格子を適合させるAMR法とGPU実装をさらに発展
  - ・ シャボン玉の形成過程:直径12.5cm(膜厚117μm)
  - 粘弾性(非ニュートン性)気液二相流シミュレーション
  - 界面活性剤の輸送を考慮:マランゴニ効果(液膜安定化)
- 今後の課題
  - ・ 動的負荷分散の導入し、大規模計算
  - MPF法による泡沫シミュレーションの研究展開 (jh20018-NAH)



S.Matsushita, T.Aoki: Gas-liquid two-phase flows simulation based on weakly compressible scheme with Interface-adapted AMR method (J. Comput. Phys., submitted)

Yos Sitompul, Takayuki Aoki: A Filtered Cumulant Lattice Boltzmann Method for Violent Two-phase Flows, J. Comput. Phys, Vol 390, No.1, pp.93-120, 2019 https://doi.org/10.1016/j.jcp.2019.04.019

国際会議発表	4
国内発表	5
解説記事	1 (注目研究in CFD32, 日本流体力学会誌)

学術賞: 松下真太郎,青木尊之 グラフィックスアワード特別賞,第24回計算 工学講演会,大宮,2019年5月30日



本研究は、科研費・基盤研究(S)課題番号19H05613「自由界面を含む混相 流の革新的数値流体シミュレーション」(2019年度~2023年度:研究代表者 青木尊之)からの補助を受けています。

